

0
七
1

明治三十三年二月二十六日 禮拜三

明治三十三年五月一日 禮拜三



改教時報

第三十號

社説

◎讀史所感

論説

◎社會問題の解釋

南浮智成

社會

◎佛骨奉迎 ◎公共心の缺乏 ◎宗教制度調

査會 ◎勤儉と奢侈 ◎世界宗教會議 ◎實業

教育の不振 ◎基督教會數 ◎社寺局の分離

◎韓國に於ける各國教界の現状

雜録

◎漫遊途上偶感

文學士 五城學人

◎雲水雜記 (六)

在大學 久保猪之吉

信界

◎至誠の心

文學士 清澤瀧之

會報

◎飛驒會佛教 ◎近江會正義

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報第二十九號目次

- 社説 感化事業
論説 感化法發布に就ての所感 日本佛教改革的青年佛徒としての歐米宗教制度の視察者に饒す
社會 各宗と紀念事業等
會 雲水雜記(五)
報 第九回釋尊降誕會等

本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌定價左の如し

| | | | | |
|-------|-----|------|------|------|
| 一部 | 一ヶ月 | 六ヶ月 | 一年 | 全 |
| 金貳錢五厘 | 金五錢 | 金參拾錢 | 金六拾錢 | 無遞送料 |

- 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 - 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十三年四月三十日印刷
明治三十三年五月一日發行

發行兼編輯人 印 刷 人

上村幸三郎
清水朝太郎

讀史所感

(上)

政教時報

佛教が日本國民の根底に浸潤して社會感化の中心となり國民の道徳を助長し、參差して日本文學の間に入り、發露して國家事業の翼賛となり、我邦思想界の霸王となり我邦精神界の半耳を執り來りしと此に千三百年、此間一盛一衰一張一弛幾多の變遷を経て遂に今日の現状を見るに至りしと雖、願みて傳教弘法二大師の偉跡を思へば何人も讚嘆追慕の念に堪へざるべし、特に日本佛教の第三期とも稱すべき鎌倉時代に至りては寧樂、平安二朝の後を受けて其發展の頂點に達し高僧碩徳鬱然として四方に起り、法相宗に解脱上人あり、三論宗に覺樹上人あり、華嚴宗に明惠上人あり、律宗に大悲菩薩、興正菩薩あり、天台宗に法池房證空上人あり、眞言宗に明任上人あり、法然上人は淨土宗を開き、親鸞上人は眞宗を開き、一遍上人は時宗を開き、日蓮上人は法華宗を開き、道元禪師は永平寺に於て曹洞宗を傳へ、榮西禪師は建仁寺に臨濟宗を傳ふ、人才雲の如く集り金壁輝を爭ひ蘭菊美を擅にす、其人物を追懷するに、或は温乎玉の如きあり、或は三千の威儀六萬の細行、戒律嚴正にして犯さざるあり、或は識見高邁、或は熱誠篤實、或は霸氣縱橫當るべからざるあり、六百有餘年の昔に遡りて之を前代に比し又後代に較するに、遂に鎌倉時代

の如く宗教的精神の充溢を見る能はざるなり、試に足利時代の宗教を見よ、疎石、妙葩、慧玄、妙超、元光諸禪師のありしと雖、義滿の金閣寺を造り、義政の銀閣寺を建つるに至りて時は漸く華奢逸遊の風に悪化せられ、所謂婆娑羅風は武士淳樸の美風を害し、朝に慘を和し夕に湯を沸かし、彷彿たる松濤の聲を聞きて終日幽邃の情を遣り或は晝はひねもすに歌ひ暮し夜は夜もすがら唄ひ明すものあり、花にあこがれ月を妬ぶの間、宗教は漸く茶室の中に隠れて武人風流の韻事を助くるに過ぎざるのみ、文學獨り五山の間隠れ、繪畫彫刻建築等諸般の美術多く佛教徒の獨占たりしは文藝史上特筆すべきの價値を存すと雖、殿堂樓閣の美麗宏壯なるは却て宗教的精神の不振を生ずるに至らざりし乎、戰國割據の時代、應仁文明の頃慧燈大師が熱心燃ゆるが如き信仰を以て眞宗の傳道に従事したるが如きは、後代の宗教家たるもの、忘れんと欲して忘る能はざる所、しかも其後徳川氏三百年の治世又傑出の人を見ず、澤庵、元政、鐵眼、白隱、慈雲、痴空、等稍、著はるゝといへども其外氣力精神の見るべきもの誠に寥々たり、特に徳川氏の末世、一種の國學主義神道主義盛んに行はれ、鎖國攘夷の思想頗る勢力あり、歐洲各國が十九世紀文明の新歴史を開かんとする頃我邦にありては享和元年(千八百〇一年)志築忠次郎なるもの獨人ケンブルの日本誌を譯し鎖國論を改題し、異國異風の恐るべく、邪說暴行の惡むべく、外を禦ぎ内を親むの最も切要なる所以を唱導し、此に於てか魯内卑外の風ひとり行はれ、江戸蘭學の祖と呼ばれし杉田玄伯等の一派、

時代精神に反抗して大に開國進取の主義を唱導せしといへども、頑夢未だ醒めず、彼玄伯は痛快の言を以て時人を罵倒して曰く、「武家柔弱なる證據は御鹿狩の時數日間繋ぎ置き眼を縫候猪を捕ふるにさへ暇乞して別の盃取りかはす様なる振舞なり、其外小普請の輩は朝夕に唄淨瑠璃、琴三味線、歌舞伎、もの真似に日を暮し、善き分が茶湯、生花、又鳥飼、植木を内々商賣する迄の事なり、個様の者何萬騎ありとも物の御用に立べからず……衰弱至極の世といふべし」と以て太平の象を知るに足る、其水戸弘道館の起るや大に惰氣を振作し以て全國を動かせしと雖、所謂其御國的思想は此に至りて益々盛んに蠻學禁止の沙汰起るに至りて其極に達せり、平田篤胤、秋田に生れ海内に雄飛し宇宙を睥睨し縦説横議佛教を罵倒し鋭鋒當るべからず、佛教は國學主義神道主義の下に壓倒せられ、維新の大革變に際しても、佛教徒は排佛毀釋論の下に苦戦し漸く其命運を保ち、彼が如き一大變動に對しても尙唯々語々として其命を奉じたりき、維新の後行誡、日薩、旭雅、獨園、環溪、の諸師學識德行一代に絶し時人を教化すると頗る多し、しかも相繼ぎて逝き、今や第二十世紀の勢頭に立ちて、教界人物を想ふの念甚切なるものあり、日本佛教徒たるもの此際如何なる覺悟を以て立たんとするか、若し夫れ鎌倉時代に於けるが如き各宗祖師の心を以て心とし、各、第二の親鸞たり日蓮たり、道元たらんとを期せば、偉人の出現を待たずと雖、庶幾くは教界の刷新日を遂ふて夫れ進まんか、學に於ては將に平安朝二大師の識見を有せざるべからず、事業に於

ては再び寧樂朝時代の社會的感化を再現せざるべからず、佛教徒たるもの須く大決心を以て勇往猛進すべき也、世の毀譽褒貶の如き豈に顧慮するに暇あらんや、余輩常に思ふ現時の日本國民に欠く所のもの三、曰く狹量にして人を容るゝの量なく、依然として今尙島國的根性を脱せざるもの一、創業に巧みにして守成に鈍に、萬難を排して其當初の精神を貫徹し其事業を繼續するに能はず朝變暮改以て耻とせざるもの二、利己の念に強くして社會公共の爲に盡すの念なく、社會の公德を重んぜざるもの三、若し夫れ宗教的精神の鼓吹に由て此三弊を破り以て大度量の國民を造り、公德を重んじ守成繼續に堪能なる人物を養成するを得ば是れ實に吾人の幸なり

論說

社會問題解釋の精神

南浮智成

我國開港以來未だ久しからずと雖も、歐米の文明は日々に輸入せられ、三十年の短日月を以て我國に移植せらる、誰か其發達の迅速なるに驚かざるものあらんや、然れども一利一害は數の免れざる所にして、文明の美華と共に其弊風は輸入せられ、我國固有の美德は日に消滅し、生存競争の社會と變じ、強は弱を併せ、大は小を兼ね、遂に社會問題の萌芽を見すに至る、

今にして之れを矯正せざれば我國の前途大に憂ふべきものあり

社會問題とは何ぞや、曰く貧富懸隔問題なり、文明の進歩と共に、富者は益々富み、貧者は益々貧に陥り、兩者軋轢終に社會の破壊せられんとする問題なり、見よ、鐵道の敷設に依ては幾多の車夫は職を失ひ、紡績製糸器械の發明に依て農家の婦女子は職を失ひしに非ずや、更に驚くべきは電氣力の産業に應用せられたるにあり、電氣力一たび産業に應用せらるゝや、幾多の職工、工女は職を失ひ糊口に窮すと雖も、資本家は其資力の日に増加するのみ、是れ工業上の貧富懸隔の状態なるが、農商業何れも然らざるなし、小農は大農の増に兼併せられて小作人と變じ、大農は勞せずして其田圃の増加するのみ、小商は大商のために顧客を奪はれ、日に可憐の境遇に沈み、あるにあらずや、此多數の貧者は少數の富者の壓制に堪へずして、遂に社會組織の不完全を認め之れを破壊せんとするは、是れ社會問題にあらざるや、然るに我國の現状を見るに、此恐るべき社會問題の萌芽は日々現はれんとするに當りて、「トラスト」の組織は更に其發達を迅速ならしめんとす、國家を經綸せんとする政治家、社會を救済せんとする宗教家、之れを輕視して可ならんや、世人動もすれば慈善事業を以て社會問題の解釋となし、孤兒院、施療院、貧民救助等の事業を以て其主要なるものとなす、然り、孤兒院、施療院、貧民救助等は慈善事業の主要なるものなりと雖も、慈善事業は社會問題の主要の解釋と云ふこと

能はず、孤兒院あるがために棄子を獎勵し、施療院あるがために疾病に供ふる貯蓄を怠らしめ、又貧民救助あるがために遊民を生ずるに至る、慈善事業は之れを企畫するの意思にして、單に物質的救済をなさんとするに止らんか、能く物質的救済をなし得れども、精神的殺戮をなすものと云ふべし、自ら勞せずして人に寄りて衣食せんとする徒増加するも、社會は不健康に沈むのみ、不幸福に陥るのみ、物質的救済を以て社會を救済せんとする慈善家の如き、沈思熟考せずして可ならんや、然れども余は慈善事業を以て社會問題解釋の事業にあらずと云ふにあらず、唯物質的慈善を以て社會問題の主要の解釋にあらずとするのみ、父母死して寄る所なき孤兒は、孤兒院にて救済すべし、全力を盡して勞働せしむ貯蓄し能はざりし者にして、病魔のために苦められんか、施療院は之に醫藥を與ふべし、又遊惰を貪らざる貧民は救済すべき也、慈善家にして此心を喪失せざらんか、予は慈善事業も亦社會問題解釋の一美舉たるを疑はざるなり、然れば社會問題の解釋の眞精神とは云何、曰く物質的救済を從として、精神的救済を主とするにあり、精神にして救済せられざらんか、救済は社會の利にあらずして寧ろ害なり、又幸にあらずして寧ろ禍なりと云ふべし、然れば精神的救済とは云何、曰く、獨立の精神を與ふるにあり、乃ち各人をして此獨立の精神を放棄して自ら發達を計らしむるにあり、而して此獨立の精神を與ふるに二種あり、曰く、政治的方法と、宗教的方法とは是れなり、政治的方法とは何ぞや、曰く、貧者

か富者のために抑制せらるゝは、法制の不完全に歸す、故に政府は法令を制定して之れを實行監督し、以て、貧者にしめて能く力行するをらんか、富者のために抑制せられざるを期するにあり、宗教的方法とは何ぞや、曰く、貧者を救ふに宗教的信仰を與へて、精神の獨立を計らしむるにあり、宗教的信仰にして與へられんか、貧者は已に精神の安慰を得て、富者を見るも羨まず自己の責任を盡して、悠々として餘裕あるべし、而して宗教的救済に至りては、獨り貧者に止せらざる、富者をも救済すべきなりと雖も、今の所論にあらざれば唯貧者に付て云ふのみ、政治的方法と宗教的方法は、互に反對するが如くなりと雖も、共に欠く可らざる二要素なりと云ふべきなり、政治的方法のみ存して宗教的方法ならんか、社會は生存競争の戰場となり、更に新なる社會問題の提出せらるゝの恐わらん、宗教的方法のみ存して、政治的方法ならんか、社會は沈滞して其進歩を呈せざるの弊を生ずべし、兩者併行して存在せんか、個人は羨むとなく驕るとなく、其責任を盡して、身心共に其全きを得、社會は進歩して、然も鬭争するとならん、是れ蓋し本誌(政教時報)か、社會問題を以て綱領の一に加へ、之れを講究せんとする所以ならんか

社會

◎佛骨奉迎 大谷派新法主は今回各宗の推薦により、佛骨奉迎の正使として暹羅國へ渡航のことに確定し、本月九日

に此點に向て注目せざるべからず、

◎宗教制度調査會 去月京都に於て七八名の代議士相會して宗教制度調査會を設立する事に決し不取敢規約を草したる由なるが其重なる個條は、一帝國の國體と皇室の尊嚴を護持し奉ること、一帝國古來の宗教及其慣例を保護すること、一締盟各國の宗教制度を調査斟酌すること、等にして調査會設立の舉固より必要なり、而も其目的や善美ならざるにあらざり、其規約の頗る漠然として要を得ざるが如きは稍々惜む所なり、此調査會は京都に設置し只帝國議會開會前より閉會まで東京に移すと云ふが如きは是れ世人をして徒に疑を容れしむべき個條にあらざるや、吾人をして之を見れば應々京都に設置するの要なきなり、京都は各宗の本山あるを以て便宜とすか、然れども之が會員は貴衆兩議員を以て組織する者なりと云ふ、京都に設置するの不便を免れざるべし、從來の慣例將來宗教法の制定に關し各宗當路者に協議すべき要あらむも、兩議員諸氏にして、異に之が調査の任に當り審査討議、よく時弊を察し完全なる宗教法を立てんどの熱心あらば、各宗の當路者は自ら進で東京に來り諸氏と共に十分なる審査を遂ぐるの勞は決して之を厭はざるべし、且つ東京に於ては宗教制度調査の任に當る人敢て少きに非ざるなり、諸氏にして飽迄之を京都に置き、四五の少數なる會員を以て之を調査するは甚だ困難なる事柄たるのみならず、漸く諸氏の心事を疑ふもの起らざるなさを保せず、昨年來より宗教界の醜事世に傳ふるが如く果して事實なりとせば殊に諸氏の一考を促し、

神戸港解纜の由に承る、隨行として南條博士、石川馨、大草憲實の三氏も同時に出發せらるゝと云ふ、吾人は謹て無事歸朝せられんことを祈る

◎公共心の缺乏 社會の發達を害し國家の進運を妨ぐる一大要素なり、公共心の發達は社會進歩の淵源にして歐米の今日あるは詢に此公共心の賜なりと云ふべし、彼の個人主義の發達したる英國にありて公共心の非常に發達を來したるは吾人の竊に意外とする所なり、彼等は惜げもなく其財産を抛ちて學校、感化院等の諸種の社會事業、慈善事業に力を竭さるゝは一大美譽として之を贊するに躊躇せざるなり、吾人は之を以て個人主義を鼓吹するものにあらざる、併しながら個人主義、社會主義若は國家主義の如何に拘らず、公共心の美德を發揮し之を發達せしむるものこそ吾人の最も贊する所なり、教育の不振果して何れにあるか、殖産の道與らざる、社會事業の萎靡として進まざる一として公共心の缺乏に基かざるはなし、歐米各國の公共心に富むは財產制度の完全によるべしと雖も強ち之を財產制度の完全にのみ歸すべからず、彼等は先天的に感化を受けたる宗教心の發達は重なる原因として吾人の疑はざる所なり、我國民に公共心に薄きは元來の特性にあらざるして、宗教の感化未だ國民の腦裏に印象せざる現象にあらざるなきか、獨り國民の罪にあらざるして國民の品性を陶冶し精神を支配する宗教家も亦其責に任せざるべからず、我國社會事業の比較的進歩せざる所以のもの決して偶然にあらざるなり、今後身を挺して社會事業に盡瘁するもの大

反省を請はんと欲する所以なり

◎勤儉と奢侈 社會生活の度が急激に進むに従ひ勤儉の美風が漸々退歩し來りて、所謂奢侈の風増長するは自然の勢にしてこれ決して喜ぶべき現象にはあらざるなり、我國既往十年に比すれば驚くべく奢侈に流れつゝあるは都鄙一般の傾向なり、これ廿七八年の戦勝の影響然らしむるものありと雖も、國民の貯蓄心缺乏の一大弊害にあらざるなきか、政治家は政費膨脹を以て奢侈の源泉となすもこれ一面の觀察に過ぎざるなり、上流に位する者にして自ら進む互に奢侈贅澤を誠め勤儉以て事に従はざれば、容易に奢侈の流行を防ぐこと能はざるべし、上の好む所下之に従ふ、所謂紳士、紳商なるものは一夜にして數百金を散するの豪遊を試みざれば其體面を汚すものなりとなし、盛に奢侈を極むるが如き根本的に誤謬を抱けるものにして我國社會發達の不健全なる想ふべきなり、曾て某貴婦人會に質素を旨として綾羅を纏はざることを誓ふや、貴婦人の出席するもの漸次減少を來せりと云ふ、また曾て某小學校に於て卒業式の時と雖も一般に綿服を用ふることを命せしに、小言は富家の父兄より出で、遂に其事止むたりと云ふ、噫奢侈は遂に禁ずること能はざるか、勤儉の美風は長く保つ能はざるか、一たび奢侈の風に侵染したるもの遊惰の民の常職に就くを好まざるが如く容易に其味を忘るゝこと能はざるべし、今にして國民自覺せずんば不測の禍を招く恐れなしと云ふべからず、敢て國民の警醒を望む

◎世界宗教會議 巴里博覽會の開會を期として、巴里

にては諸種の學術上及智識上の會合催さるる中に、宗教會議は最も興味あるものなるべしと云ふ、同會議は今年九月の三日より六日迄巴里に於て開かる、嘗て、研究事項は一世紀の初めより今日までの各國宗教歴史に關するものとし、更に之を支那、日本、蒙古、埃及、アツシリヤ、チャルデアの諸國を宗教、猶太教、希臘教、羅馬教及び基督教の諸部門に分ちて調査すべしとなり

◎實業教育の不振 去月日本新聞紙上に掲げたるものを見るに、此種に屬する學校の數を聞くに、徒弟學校は公私を合せて二十餘校にして生徒の數千有餘人、實業補習學校は百十餘校生徒の數七千餘人、裁縫學校は三十年末に於て學校七十七、生徒數一萬百十一人にして、之を同年末調査の中學校數百五十六校、生徒五萬二千二百六十人にして前者と非常の相違ありと云ふべし、若し此等の學校の内容を窺へば實業教育の本旨を過まり、或は高遠に流れて民度に適切ならざるものあり、或は全く科學的要素を缺きて時代の進歩に伴はざるを冒して其實普通學校と甚だ別別しがたきものあり云々以て實業教育不振の一端を知るべきなり

◎府下最近の基督教會數 東京府社寺課の去月末の調査に係る府下基督教各宗派に屬せる教會及び講義所等の數は左の如し

| 宗派名 | 教會數 | 講義所數 | 合計 |
|---------|-----|------|----|
| 日本基督教會 | 一八 | 三 | 二一 |
| ハリストス正教 | 五 | 四 | 九 |

| 宗派名 | 教會數 | 講義所數 | 合計 |
|-------------|-----|------|----|
| 日 本 聖 公 會 | 一六 | 一 | 一七 |
| 美 國 監 督 派 | 八 | 一 | 九 |
| 日 本 美 以 美 派 | 六 | 一 | 七 |
| 天 主 公 教 | 八 | 一 | 九 |
| バプテスマ派 | 六 | 一 | 七 |
| プロテスタント派 | 八 | 一 | 九 |
| 新 教 派 | 三 | 一 | 四 |
| キリスト教 | 二 | 一 | 三 |
| メソヂヤン派 | 三 | 一 | 四 |
| 日本組合基督教會 | 一 | 一 | 二 |
| 基督友會 | 一 | 一 | 二 |
| 福音派 | 一 | 一 | 二 |
| 普 及 福音教會 | 一 | 一 | 二 |
| 小隊 | 四 | 一 | 五 |
| 講義所 | 一 | 一 | 二 |
| 救濟所 | 一 | 一 | 二 |
| 總計 | 一〇 | 一 | 一一 |

◎社寺局の分離 内務省社寺局を神社局宗教局に分ち例の斯波氏は宗教局長に任命ありたると同時に直に事務を分轄し參事官中川友次郎氏は神社局第一兼第二課長を屬猶垣宗正氏は宗教局第二課長第一課長心得を命せられ其他の屬官は夫れ一兩局勤務を命せられたり

◎韓國に於ける各國教界の現状 佛國カゾリック教は二百年前より其傳道を繼續したるも大院君の壓制により一時衰退し、現今に於ては各宗教上卓絶せる勢力を有し、各地に於けるカゾリック教會堂一般に政治上の危險、社交上の避禍所として信徒の數著しく増加せると共に教徒專横の非難は余の屢々聞知せるところなり、江景教徒事件の如きは其一例

該教の主教ミントン氏は三十八年間半島に生活し、氏は六十萬圓を費やせる大會堂に二百名の女學校と數千の信徒、十數名の宣教師を直轄し、其勢力傲然として佛國公使の上に出で、各地傳道政略に熱心なること他の企て及ぶ所に非らず、氏が信徒名簿には已に二十萬を數へり

プロテスタント派は主としてメソジスト、プレスビテリアンの二派あり、メ派の長老はアベンゼーラー氏也、プ派の長老はアンドウード氏也、二氏は獨り宗教者としての名譽及び勢力を有するのみならず、時として漢城の民會に同情を表し、時としてはアルレン公使の助言者として政事者の間に奔走せり、メソジスト派は主として韓國の東南部に勢力を有し、プレスビテリアン派は西北に勢力あり

メ派の下には培栽學堂、施療院、コレアンレボトリ(週刊)の如きものあり、プ派の下にはクリスチアン、ニウス(週刊)梨花學堂(女學校)濟衆院あり、共に數多の宣教師と信徒とを有す

希臘教は近頃パツロフ公使來任以後二名の僧侶來り、目下傳道を開始せり、其勢力は今日より始まるべし

我邦より各開港地及び京城に於て眞宗日蓮宗淨土宗の布教ありと雖も、僅かに租内の葬式忌日に讀經するのみ、獨り教育に於ては京城には、京城學堂、平壤には同文學堂、城津の同文學堂、釜山の開城學校、江景の韓南學堂、全州の三南學堂、大邱の達城學堂、光州の實業學校、安城の安城學堂、元山の日語學校は皆な本邦人が啓發の趣旨にて設立し、何れも多少

の成功と前途の希望を有し、各國人の事業上嶄然として超越の進歩を爲せり

病院は現今漢城病院ありて、多少の慈善施設を行ひつゝ、あり、新聞紙は漢城新報(韓文日文二種)仁川の朝鮮新報、木浦の木浦新報、釜山の朝鮮時報四種あり要之に各國の社會勢力中宗教はカゾリック教尤も大なり、教育新聞は十中七八本邦人の經營に屬し、慈善は其の希望を充たすに於て各國人の事業誠に幼稚の境に在りと云ふ

雜 錄

漫遊途上偶感 五城學人

陽春の候、會頭に隨て、學人羣に九州六ヶ國を巡回す、顧みれば十指を屈するに及ばざる僅々の日子に於て、彼廣漠たる山野を馳驅せしを以て、晨星を戴きて出でし時あり、臘月に伴ひて入りし折あり、朝に此地に在りて、夕に彼地に轉せしが如き、勿々たり、醒醒たり、此間人に接する多く、時に肝膽相照す底の知己を感せしとありと雖、而かも數分間にして袂別の已むなきあり、未だ相互の心情を披瀝し盡せりと云ふべからず、此勿々たる眼底に映じ、此醒醒たる胸裏に浮べる感想素より正當の觀察たり難く、又根底ある思想といひ難し、然れども數分時の觀察も、時に長時の間、之に慣るるよりも、却りて鋭敏なるとあるべく、勿々たる間に浮べる感想も、往々にして其餘影の深く腦裡に印象せらるるなきにあらず、漫遊

後既に一ヶ月、淺膚なる觀察、須臾の感想、概ね之を遺れ去れりと雖、中に就きて比較上深く腦裡に印象せらるる、餘影を捕捉し來りて、今之を筆にす、往々にして當を得ざるべきは素より期する所なり

◎中に至誠の存するあり、外に形はるる行動自ら眞摯なるは、西にありては筑後柳川、東にありては豊前行橋に於て之を得たり、此兩地の善男善女、老といはず、少といはず、筆食盡漿して迎ふるが如き状態あり、往々にして前庭に筵し、跪きて拜するものあるを見る、是れ宗教の信念驅りて此等の老若をして、此行動に出でしむるなり、身此境を踏みて、云爲する所あらんとするもの、中に省みて肅として箴むる所なきにあらず、特に行橋附近にありては、後にあるものは首をあげて之を目送し、前にあるものは路を避けて、一行を迎へ、疎野の中、禮讓自然にして存し、朴質の間、至誠溢るるが如く、之に對するものをして、坐るに感に堪へざらしめ、感極まりて一滴の涙を灑がしむる者あり、其故何ぞ彼等無我の童兒の珠數を手にして危坐する間には、能く廣長舌の説法の存するればなり、彼等専心の翁媪の合掌して三拜する邊、自ら巧説無碍の辯の琅々たるものあればなり、苟くも宗教の何たるを解するもの、此無我の説法に接し、此無心の巧説に遇ひて、何ぞ無限の感觸に打たれざるものぞ、宗教は人々を眞面目ならしむるものあらじ、信念は人々の本心を發揮するものあらじ、合掌する所、遂に些の彫琢を見ず、三拜する邊、遂に些の粉飾あるを見ざるなり、人をして自然の本性に反らしめ

に至りしは頗る異數となすべし、聞く、此地の有志偶政時報を得たるものあり、愛讀措かず、同志と共に之を購讀せるの餘、遂に本山と意見の衝突せるあるにも關せず、自ら信する所に向て進めるなりと

◎武雄に於ける有志運動の敏活にして統一を見る、其地の僻なるに比して、頗る多とすべきものあり、此人口、此位置にして能く此の如きは、他に因由する所あるに想ひ到らざるを得ず、果然梓島佛教會の既に三年前に組織せらるるあり、該會の中心は實に武雄にして、共同の精神に既に能く鼓吹せられつゝあるなり、何れの地に至るも、團體あるの地の運動の頗る他と異なるものあり、分業、統一、等は團體なくんば期すべからざる所、且つ群集中に一種微妙の温味、即ち個々特別の集合体ならずして其間に相互の連絡あり、有機組織としての温味は常に團體ある地之を見るが如し、團體なる哉、結合なる哉、和合といひ、無我といふは佛者の常に口にする所にして而も公同の精神、一致の氣風に於て欠くる所あるは、實に佛教恭儉の一大原因ならずんばあらざるなり

◎宗教界に事ある際、九州に於ける佛教活動の中心は久留米長崎なるが如し、兩地佛教の前途頗る望を屬すべきものあり上下、各宗、一致團體組織に於ける運動は何れの方向に向てあらはるべきか、長崎の有志は女學校設置の意ありしと聞く、文化を進めんとせば先づ良母を得ざるべからずとは千古の格言なり、文化の進運とは有形上のみを以て期すべからず、精神界の事其大部を占め、且兒童精神の傾向は良母によりて鑄治

んとせば、宗教最も其功を擧ぐべし、蓋し宗教は人の本性に具有するものなるを以て、信念の發動は、是やがて本性の發動する所たればなり、行橋附近の人心を至誠にし、其品性を鑄治せる偉人、誰とが爲す、聴くらなく、眞宗大谷派蓮井講師其人なりと、學人また同講師の事蹟を興かりさかすと雖、其宗教的偉人なりしとは遂に寸毫の疑なきなり

◎僧といはず、俗といはず、能く一致以て事を計るは筑後肥前二國に於て、之を得たり、久留米長崎二市に於ける外觀殆んど相似たるものあり、上一致の餘勢は延びて一種の制裁を形成するに至り、社會に地位を占むるものをして兎も角佛教の門内に足を容れしむるものあるが如し、外教の始めて我邦に入らざるや、筑肥の山野爲に風靡し、現今に至るも猶其形蹟の見つべきものあり、之に對する反動或は佛教をして一種の勢力を現せしめたるに似たり、久留米といひ、柳川といひ、又武雄にあれ、長崎にあれ、宗派の如何を問はず、縋素に論なく、共同して佛教の爲にせんとする風あるは明白なり、久留米、長崎の二地に於て今後必ずや有力なる會の組織を見るべきか

◎宗教法案運動の際、佛教界の二大勢力たる東西本願寺其意見を異にせるより、門末の宗教法案に對する意見自ら二大潮流を爲せりと雖、時に異例のものなきにあらず、武雄町に於ける運動の如きは是なり、此地は西派のみ、又一個の東派門末を見るなし、而して反對の論を主張して已まず、遂に起て東都の大會に列し、侃々として更に其主張を改めず、以て今日

せらるるを思はば、誰か佛教女學校の必要を認めざるものぞ、而して未だ其設立あるを聞くとなし、泰西文化の輸入地の先驅を爲し國際上の關係最も頻繁なる長崎の地に、此必須なる設備を見るに至らば、其影響實に前肥のみに限らざるなり、筑紫のみに限らざるべし、吾人は切に有志の健全ならんを祈るのみ、長崎と相並びて一大敵國たる久留米に於ける活動は如何、感化院か、育兒院か、共に是社會罪惡の根元を治するに於て欠くべからざるもの宗教は素と社會と密接の關係あるもの宗教の感化を蒙れるもの、行動の、自然にして社會改善の方面に向ふべきは、吾人至當の事たるを信するなり、而も社會改善の事たる、人心幾微の點を調治せざんば能はざる所なるを以て此點に於て宗教者は常に其手腕を振ふべきもの、育兒院、感化院等は此思想を現實にすべき好個の組織たるべきなり、◎佛教界唯一の實行家として、朝野を震撼せし、博多萬行寺の七里和上逝きて、筑紫の宗教界頓に寂寞を覺ゆ、萬行寺に詣れば和上の音容既に見る可らずと雖、和上の精神潑々として猶活動するは容易に認むるを得べし、何によりて之を徵する、和上の感化に浴せる有志數輩相計りて孤兒院を設けたるが如き以て其一端を徵すべきなり、山陽鐵道に沿ひて旅せるもの、九州各地の停車場に入りし者は、岡山孤兒院義捐團と相隣りて常に龍華孤兒院善捨箱の相懸るを見るべし、龍華孤兒院は即ち萬行寺境内に於けるもの稱なり、匆卒の際一たび瞥見せるのみなるを以て、未だ組織の如何、方針の如何等之を詳知するを得ずと雖、大体の觀察上、稍其目的を達するに近きが如

し、孤兒にありて尤も注意すべきは孤立扶けなきの思想より来る悲觀的精神を除去し、家族的快樂によりて健全なる思想を助長し、以て能く小兒の天真を發揮して快活縱横に毫も畏縮する所なからしむるは先づ其第一着歩にして、此第一着歩にして達するあらんか、以て初て云爲施設する所あるべきなり、龍華孤兒院は此第一着歩に於て優に得る所あるに似たり、他の組織は以て企圖せらるべきなり

◎等しく是前豊なりと雖、北部行橋に於ける佛教の信火の、外部に現はれたる行烟によりて洞祭せらるべきは既に之をいへり而して其南部中津に於ける教界の状況は之に反して頗る異なるものあり、僧侶偶々志を抱く人ありと雖、信徒間に於ける佛教は拂底なるが如し、既に信火なし、隨て活動なければ素ど其所、温味なきも亦其所、群集又群集、熱鬧し來るもの、個々別々にして其間に打して一團と爲すべき温味活動の見るべきなきものも如し、然れども人あり此人衆を糾合して團體を組織し、此地にありて特殊の設備を爲す、其勞想ふべし勞多しと雖是等有志の人の手によりて、既に同盟會は設置せられ、既に扇城女學校の設立を見るは頗る多とするに足る、一旦是等の組織を見る、百難を排して其健全なる發達を遂げしめん事、教界前途の爲に望まざるを得ざるなり、

◎筑紫の地、南下するに従ひ宗教の勢力を減殺す、西半にありては後筑を過ぎて後肥に入る、教界頼に面目を異にし、東半にありて前豊の南部中津附近より漸々南下して後豊大分に至る、亦教界の不振歴々指顧すべきものあり、之を聞く、熊本

狂奔せず、他の指導によりて云爲せず、自ら之を爲し、我之を理せんと意強きもの、大藩各地にありて之を見るを得べしと、熊本大分等の地、夫れ或は此自信自重あらん、希くは大我の指揮によりて教界の爲に貢獻するあらんを

◎僅に一日或は半日の觀察、當を失するもの多からん唯思ふ事はぬは腹ふくるゝわざてふ、諺に従ひ、感想に浮べる事を思ふに任せて筆にせるのみ、

雲水雜記(六)

久保猪之吉

◎越後出雲崎に奇僧ありき、名を良寛といふ、天保二年正月、七十四歳を以て病没せり、一代の性行往々常軌を逸し、模倣すべからざるものありといへども人々己を思ひ私を愛し公道は廢れ情義は荒みたる今の世に此人を説く或は防府齋たるを乞はらむや。

◎上人の父は泰雄といひ晩年髪を剃りて以南と號しき、皇典に通じ和歌俳諧などを善くせりき、嘗て京師に赴き皇室の衰へたるを打ち慨き天真錄一部を著し後水に入りて死にきといふ、その尋常人にあらざりしこと知るべし。

◎幼より上人は俗流の事を好まず、十八にして佛門に歸し後剃髮良寛と稱し又大愚と號しき、被褥は以て寒を禦ぐにといまり薄粥は以て飢を充すに過ぎず春秋村園に出て、托鉢するを常とせりきとか、歌集に

いひ乞ふと里にもいはずなりにけり
昨日もけふも雪の降れれば

の地、基督教界有数の人物を輩出し、現時猶同教の活動非常なるものあると同時に、佛教界亦頼に傑士を出だし他山の石能く我珠を磨きて、双々君子の争を爲す、頗る觀るべきものありと、現に此地を蹈むに及び、事の意外なるに一驚を喫せり、大分の地、佛教界現時亦有数の人物を出す、而して人物間の調和の點に於て、上下の一致の點に於て、道俗の關係上に於て遺憾なき能はず、兎も角教界の活動、公同的温味等に於て未だといふ所なくんばならず、然れども輓近同歸會の設立あり、道俗手を携へて實行を旨とし教界の刷新を計らんが爲、先づ之が着手として夏期講習會をも現出し、講演演説をも舉行すると聞く、該會の期望にして達せらるるの曉は即ち教界の刷新の行はるゝの時なり、該會の發達し行くは即ち佛教思想の復活せられ、傳播せらるるなり、吾人は主として團體に重きを置き、今後の活動は團體によりてのみ最も多くを爲し得べきを信するもの、同歸會に望むや大なり、

◎一言にして之を言へば、信徒の熱情は行橋、柳川に於て之を見、各宗の融和は武雄、柳川、長崎に於て之を見、道俗の調和は久留米、長崎に於て之を見る、後筑、前肥の地、僧界特殊の傑物なく、自ら公同の精神を發揮し易きが如く、又古來異教との交渉上、其反動として信徒間に佛教に對する同情を惹起せるが如し、大分、熊本の二地、往々にして僧界傑物ありと雖相互の間却りて調和を缺くが如き觀あり、且つ信徒間には多く宗教の勢力を見ざるに似たり、之を聞く、大藩根性なるものあり、自重の心厚く、自信の念強く、他の煽動に遇ひて

とある如きは實詠なるべし、心中淡如として自然を樂むとこそ趣あり。

◎常に幼き童女を愛すること限り無く此を集めては毬を投げ草隠しを爲す等己れを忘れて樂めり、人のその意を問ふものあれば答へて曰く、われその天真にして偽無きを愛すと、予嘗て郷里の安部井盤根翁に隨ひて江東に梅を訪ひき、會小學生徒の一群遠足せるにあふ、翁白髯を撫して曰く、議論無さうな顔かなと又曰く、理屈はいへども子供は大好よと兒童の天真を愛しうる人は儘かに天地の大謎の一部を解しうる人なり。

◎人の衣服を贈り財錢を惠む者あれば辭せずして皆受けき、されど路上凍餓の人を見る時は衣を脱して此に與ふるが性なりきと、又ある時食を乞はむとて一民家に立てりき、その家會物を失ひけるが上人の異様なるを見て盜となし直ちに捕へて縛したり、さて土を掘りて埋めむとしつれども上人低頭辨する無し、時に上人を識れる人來り大に愕きて曰くこれなむ高僧良寛師なりと村人始めて之をゆるしき、その上人に冤を辨せざりしは何事ぞと問ひしに、かくなりて辨せむも免れえじとおもひつれば也と答へきといふ、所説薄くして翻々波上の木葉に似たる世の中には聲大にして榜標すべき値無からずや。

◎長野の人あり高橋白山翁と云、今尋常師範學校の倫理を講演せらる、歸途翁を訪ひ相語ること半日談盡さず、更に日を約して相談すること又半日、それ長野の町は善光寺を中心

として集りたる商估より成れるところなれば一の氣風も無く教育の必要を感じる人も少し財産家無きにあらねどその子弟を送りて高等の教育を受けさせむといふものは無し、甚しきは師範學校に送りて官費の教育をうけさせるものさへありとや。

◎翁は此洞中にありて三人の令息を大學に入れ玉ひたり、翁が家決して餘資あるにあらす、富人といへども三人をして高等教育をうけしむるは難しとするところ、而して多からず翁の主張を聞けば曰く、世の人の其子弟を教育する所を見るに假令ば農夫が春に種子を下して秋に收めむとするに似たり、何ぞ教育の本旨を誤るの甚しきや、予の如きは何の求むる所けあらざれども親として子を教育する務ある事を自覺し又その子の發達し行く事が愉快にして禁じ能はざる也、されば予は彼等に對して何を爲せと勸めし事も無く老後の養を求めたる事も無し、唯彼等が己の傾向を察しその研究を忽にせざるを以て足れりとする何ぞその言ふ事の俗を離れたるぞ、親にして此考無くれば子弟の教育は望むべからず、天下の教育は擧るべからず。

◎親にして子弟の教育に求むる所はその己を資するに在り、されば世上には往々成功すべき天才を有しながら父兄の命令の爲めに谷間の枯木となりはつるもあり、或は修學の中途にして召還せらるゝもあり、その他悲しむべき事實は往々耳にするところなり、予の子弟たるものも亦その意を体し唯衣食の資を得れば足れりとする傾あるはその父兄たる

ものが要求する所小なるに因らざるばならず、若し世の人に士にして翁の心を心となし又師父たる者の其意を倣はゞ天下の教育見るべくして人材の發達見るべき者あらむを。◎今度獨逸留學中法學博士になられたる高橋作衛君は實に翁の第一子なり、第二子雄次郎君は工科大学にあり、第三子の君は文科にあり、おのゝ常人と理想の異なるものあり、實に翁が教育の關するところにあらざらむや、予の敬服に堪へざるどころ也。

信 界

至誠の心

清澤 滿之

至誠の心は廣大なるものである、悠久なるものである、此心の廣大なることは天地に充塞し、此心の悠久なることは三世を貫くことである、此心の廣大悠久なることに就ての詳を覆せんとするではない、只吾人が此の如き廣大悠久なる至誠の心を持つて居るか居らぬか、若し持つて居らぬならば如何にして之を得ることが出来るかと云ふことは、吾人の最も意を留むべき事柄である、先づ第一に吾人は立派に至誠の心を持つて居るとは云ひ難ひ、吾人は至誠の心を持ちたいと思ふ、然れども之を持つことが甚だむづかしい、今日世間に墮落とか腐敗とか云ふことがやがやまししいが、其根源は何れにあるかと云はゞ、つまり至誠の心が缺乏して居るからである、古來の聖人や賢人が世間に出で、教を設けられたるは何の爲である

るかと云はゞ、つまり至誠の心を振起せんが爲であつた、吾人は此至誠の心に就いて深く考へねばならぬことである、今此至誠の心を佛敎に就て尋ねるに、佛敎の目的はつまり至誠の心を吾人に發得せしめんとするの外はない、貪欲を斷せよ、瞋恚を止めよ、愚痴を治せよ、煩惱の繫縛を解脱せよ、佛陀の慈悲を信樂せよ、等の教旨は外の事ではない、つまり至誠の心を發得せよと云ふことである、然らば此上に於て只尋ねべき要件は如何にせば其至誠の心が得らるゝやの問題である、吾人は今之を釋迦牟尼佛の敎に就て聞かん、

釋迦牟尼佛の敎は、至誠の心の天地に充塞して居ることを悟らしむるに種々の方面より、其敎訓を施したるものであるが、其要點は蓋し天地萬物の根本真理を指し示して、其真理が至誠なるものであることを知らしめんとしたるものである、若し天地の真理が至誠なるものであれば、其真理に依て存する所の事物は皆悉く至誠なるものでなければならぬ、天地の事物が皆悉く至誠なるものであれば、世界に邪偽罪惡煩惱など云ふべきものはあり得ずである、然るに世界には邪偽や罪惡や煩惱や苦悶やが充満して居る様であるのは如何と云ふに、其は我等の心の外に此の如きものが存在して居るではない、我等の心が迷ふて居て天地萬物の真理を辨知せぬから此の如き者が現れてゐるのである、我心の迷ひさへなくなれば真理が明かに見らるゝことである、真理さへ明かに見らるれば顛倒妄念は消滅して邪偽罪惡は其立場を失ふに至ることである、佛敎が常に因縁因果等の原理を宣揚する所以は全く是が

會 報

飛驒佛敎會

同地の有志上木甚兵衛、吉島磯松、山下房太郎、竹田得雄、春國嚴覺、三島秀亮、白川芳縁の諸氏發起となり昨年七月以來題號の如き團體を組織し、毎月一回開會し演説并に徳義上の談話を試み爾後追々盛會に赴き、會員の如きも千名以上に達し尙益々増加し來るよし、本月下旬或

は來月上旬の頃、發會式舉行の由にて久我侯爵招聘の事にて同侯多分臨席の事になるべし、吾人は切に其發達成長を望むと共に有終の美を濟さんことを冀ふ、其規約を得たれば左に掲ぐ

飛騨佛教會綱領

- 一 皇室ヲ翼戴シ佛教ヲ尊奉スル事
- 二 四恩ヲ念報シ人世ノ徳義ヲ履踐スルノ志アル事
- 三 社會問題ヲ研究シ慈善的事業ヲ興シ善良ナル家庭教育ヲ獎勵スル事

本會規程

- 〇名稱 第一條 本會ハ飛騨佛教會ト稱ス
- 〇位置 第二條 本會ハ本部ヲ高山町眞宗大谷派飛騨學場内ニ置キ支部ヲ各町村樞要ノ地ニ置ク

〇組織

- 第三條 本會ハ綱領ノ主義ニ賛同スル者ヲ以テ組織ス
- 第四條 本會ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ
 - 一 毎年一回以上名士ヲ聘シ演說講話ヲ開設スル事
 - 二 毎月十日會員相集リ本部内ニ於テ講談講話ヲ催ス事
 - 三 毎年四月八日釋尊降誕會ヲ執行スル事
 - 四 時宜ニ依リ本會ノ主義ヲ翼賛スヘキ冊子ヲ配付スル事

〇會員

- 第五條 會員ヲ分チ左ノ三種トシ各會員章ヲ附與シ特別會員及正會員ニハ特別章ヲ附與ス
- 一 特別會員 一 正會員 一 普通會員

第六條 本會維持ノ爲メ特別會員ハ拾圓以上正會員ハ三ヶ年間毎月五錢ヲ普通會員ハ入會ノ際貳拾錢以上ヲ贈出スルモノトス

但正會員ニシテ一時出金ノ者ハ壹圓五拾錢トス

第七條 本會ノ主義ヲ害シ及其體面ヲ汚スヘキ行爲アル者ハ幹事及評議會ノ決議ヲ以テ除名ス

第八條 佛教ノ繁榮ヲ妨ケントスル不正ノ行爲アリト認ムルハ何人ニ拘ハラズ自衛上之ヲ排斥スヘシ

第九條 本部ニ一般ノ會員名簿會計簿及記録ノ三類ヲ備ヘ置クモノトス

(以下略ス)

◎正義會 は近江東淺井郡速水村の有志の組織にかゝり、三十一年八月を以て發會式を擧げ、爾來銳意熱心佛教の教旨に基き徳育養成の本旨を取り今後専ら社會的事業に力を竭さるよし、其會則は左の如し

正義會々則

- 第一條 本會ハ正義會ト稱シ位置ヲ速水村大字今ニ設ケ年齢十三歳以上ノ男子ニ限リ會員タルヲ得
- 第二條 本會ハ徳義養成の組織トシテ其目的左ノ如シ
 - 一 神佛ヲ崇敬シ忠孝ノ道ヲ恪守シ尙ニ誦相依ノ宗義ニ悖ラサルヲ
 - 一 精神ヲ確平タラシメ社會ノ信任ヲ期スルヲ
 - 一 交誼ヲ敦厚ニシ智識ノ交換ヲ爲シ有爲活潑ニシテ敵愾ノ氣象ヲ養成スルヲ

一 風紀ノ振肅ヲ圖リ愛國ノ志想ヲ鼓舞振作スルヲ

一 公私ノ利益ヲ論究シ及當區ノ圓滑ヲ圖ルヲ

第三條 本會ハ通會臨時會ノ二ニ別ツ

第四條 本會ノ目的ヲ達スル爲メ四期ニ通會ヲ開キ義氣ヲ獎勵シ或ハ有益ナル論議ヲ爲シ亦ハ時宜ニヨリ名師ヲ招聘シ演說及ヒ説教ヲ開進ス

第五條 本會會員タラントスル者ハ會頭ニ申込ムヘシ退會亦全シ

第六條 會員中非行アルモノハ通會會若クハ臨時會ノ決議ニヨリ忠告スルコトアルヘシ尙改悛ノ情見ヘサルトキハ除名シ尙飽マテ之レヲ排斥シテ絶交スルヲモアルヘシ

但シ會員外タリトモ非行アルトキハ略本條ノ例ニヨル

第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一 會頭 壹名 副會頭 壹名 評議員 叁名

(以下略ス)

◎九州巡回の記事は次號にゆづる、尙各地より續々通信わらんことを望む